

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さん ぽ う 三方よし

第43号

2018/6

7代目小泉新助の命で立木森之助を名乗りその後、養子にむかえられた三代目小泉重助は、日露戦争従軍後、大正5年(1916)に大阪に小泉重助商店を開業した。商売熱心かつ好奇心旺盛で、大正元年の中国への視察を皮切りに大正13年には、すでに朝鮮半島で呉服店を展開していた同郷の中江勝治郎とともに、アメリカ留学経験がある貿易商で親戚の小泉精三の案内で3か月に及ぶ北米商業視察に出かけている。さらに昭和6年には念願の渡欧を果たし、ヨーロッパから大西洋を航海し、アメリカ大陸

を横断、太平洋を越えて6か月の間に25か国を巡っている。未知の世界へのあくなき探求心は、その後、小泉の事業展開の礎を築いていった。勝治郎と重助の二人はともに北米視察したが、その後の足跡は大きく異なる。中江勝治郎は呉服店から三中井百貨店を次々展開するも第2次世界大戦後、外地のデパートは壊滅する。一方、帰国後、日本の問屋のあるべき道について真剣に考え始めた小泉重助は、「小泉の光明は独自の商品開発によって見出される」ことを確信し、その考えは後の経営方針の柱となった。



乗船ラベルやトラベルステッカーが貼られた3代目小泉重助の洋行カバン。



北米商業視察のメンバー
(写真右から小泉重助、中江勝治郎、小泉精三)
写真提供：いずれも近江商人博物館

CONTENTS

特集：小泉グループのCSR経営

創業家 小泉重助家 ● 末永國紀 氏	2
小泉産業グループのCSR経営 ● 榎藤浩二 氏	6

企業集団小泉産業グループの創業家 小泉重助家について



東近江市眞作山麓にある小泉新助家の歴史を刻んだ
記念碑。7代目小泉新助が創業150年にあたる明治
20年（1887）に建立した。
写真提供…近江商人博物館

本家小泉新助家の創業

小泉重助家の系譜を訪ねると300年の歴史があります。小泉重助家の本家は小泉新助家で、この初代小泉太兵衛が享保元年（1716）播但地方に麻布の持ち下り商いを始めたのが最初であると伝えられています。

小泉重助家の本宅は、滋賀県の東近江市五個荘山本町にあり、登録有形文化財に指定されています。すぐ近くに眞作山があり、その山麓に記念碑という記念碑が設けられ、壁面に小泉新助家の歴史が書いてあります。これは、7代目の小泉新助さんが、先祖が持ち下り商いを始めてから150が経った明治20年

（1887）に作られたものです。よく見ると、人間の形に似ています。六部の姿を象徴しています。六部とは、仏壇を背負って国々を回る巡礼僧のことです。初代は、享保12年、商売を始めてから12年後に、甥の小泉利助に後を託してこうした格好で諸国巡礼に出て商売を辞めました。

初代は 家族的に非常に不幸で、6年間の間に一番親しい親族5人を亡くしたことが動機で回国の六部になられたと檀家寺の法連寺過去帳を調べて分かりました。後事を託された利助の子どもが新助を名乗り、小泉新助家ができます。

初代小泉重助の誕生と幕末・明治初年の商い

その後、五代目の小泉新助さんの子どもに男の子が3人いました。長男が六代目小泉新助、2番目が小泉重助、3人目が小泉嘉兵衛で、文政7年（1824）生まれの2番目の重助さんが万延元年（1860）に分家独立しました。この3人の兄弟は共同して商売をし、弘化4年（1847）には、京都烏丸三条上ルに初めて出店し、近江屋新兵衛を

名乗り、明治4年（1871）には大阪東区備後町3丁目に開業しています。初代の小泉太兵衛さんから数えて130年後ぐらいのことで、非常に揺籃期は長かったのですが、130年後に出店を開くということは近江商人には別に珍しいことではなく、外与さんも4代にわたる行商の後に出店を開いています。

初代重助さんのメモから幕末

講師



同志社大学名誉教授・三方よし研究所顧問

末永 國紀 氏

1943年福岡県に生まれる。佐賀県出身。同志社大学経済学部卒業。同大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。

著書「近代近江商人経営史論」有斐閣1977、『近江商人入門 CSRの源流「三方よし」』サンライズ出版2004、『近江商人 三方よし経営に学ぶ』ミネルヴァ書房2011 ほか



国指定登録文化財の小泉重助家主屋。4間取型で2階にも座敷飾りの整った居室を持つ主屋。小家蔵や辰巳蔵といった土蔵群のほか、納屋などの附属建物、表門や平などの屋敷構えが一連としてよく残っている。写真提供：近江商人博物館

から明治初期にかけての商いの様子が分かります。よく知られている当時の長者番付表を見る

地方の富豪として過ごした二代目重助

15歳で資産を引き継いだ二代目小泉重助さんは、家庭的に恵まれず39歳で独身のまま亡くなりました。15歳で受け継いだときの資産は2万5千両、今の価値で何億という資産を受け継い

中興の祖、三代目重助

三代目の重助さんは、布施嘉七と七代目新助の妹「たね」の次男として生まれ、3歳で七代目新助の命により立木森之助を名乗り、15歳で京店に入り、26歳で小泉家の選定養子になりました。20代の5年間は紀淡海峡の由良要塞で軍人として過ごし、日露戦争に従軍しています。大正5年（1916）、重助39歳の時には、大阪備後町3丁目以小泉重助商店を開業しています。この方は大変几帳面な記録を残し、大正5年から昭和15年まで非常に堅実な経営をしていました。決算期は48回ありましたが、そのうち赤字だったのは7回だけで、その中でも大きな欠損だったのは第1次大戦後

と小泉一党が非常に有力な商業集団であったことがわかります。

だものの、近江商人としてのトレーニングを受ける暇がなかったのも、地方の有数の富豪として過ごされ、はやりの新興企業に手を出されなかったことで、資産と家の名前が残りました。

の戦後恐慌の時と、昭和15年の税制の改革時です。当時の税制改革ではいわゆる源泉徴収税ができ、当時個人商店だったのでいきなり所得税が跳ね上がったことで大きな赤字になりました。当時の差し迫った鉛筆書きの小泉商店事業目論見書が残っていますが、三代目は翌年には株式会社を改組し、長男（四代重助）を中心に若手従業員に経営を委譲しました。このときの設立資金は30代の若い従業員も引き受けるといい、これを三代目は了承しています。昭和18年には余剰人員対策として小さな五光精機工業を買収して小泉産業の基礎を作りました。



小泉家紋の「丸に三つ鱗」を変形したグループ社章のミツウロコには一つ一つの▼に得意先、仕入れ先、先人への恩恵の「三恩」の思いが込められている。



日露戦争にも従軍している軍服姿の三代目重助
写真提供：いずれも近江商人博物館

今に引き継がれる小泉イズム

この三代目は、自分の葬式の挨拶を生前につくられ、葬式の段取りも決め、今という家族葬で行うよう指示しています。お亡くなりになったのは大阪空襲の直後でしたが、当時の状況として仕方がないことでもあったのです。死亡通知の方法までも指示するなど死生観がはっきりした人でした。

さらに、従業員に対する手当が非常に手厚かったということが、この分厚い帳簿を研究してよくわかり、利益処分の30%は従業員の配分に回しています。すぐく利益が出た時には半分ぐらいを従業員の手当に回しています。そして非常に有能な人をスカウトしています。そうしたひとりが立澤四郎さんで、現在

の滋賀大学経済学部出身で、大変優秀な人でした。三代目重助さんが将来を託す人材と見込んだ立澤さんは四代目重助さんと同時に入社し、軍隊から復員後は焼け野原の大阪で電熱器の製造販売を担当し、絶対的な商品不足の中、営業成績は大きく進展しました。

五光精機工業を買収した背景にも従業員を大事にする気持ちが大きく働いています。三代目重助さんに将来を託された立澤さんは「人格の育成、向上なくして、企業の発展はない」との信念から戦後、経営の中核となっていく多くの人材を育て、この考え方はその後の小泉産業グループに引き継がれているのです。

小泉300年経営のポイント

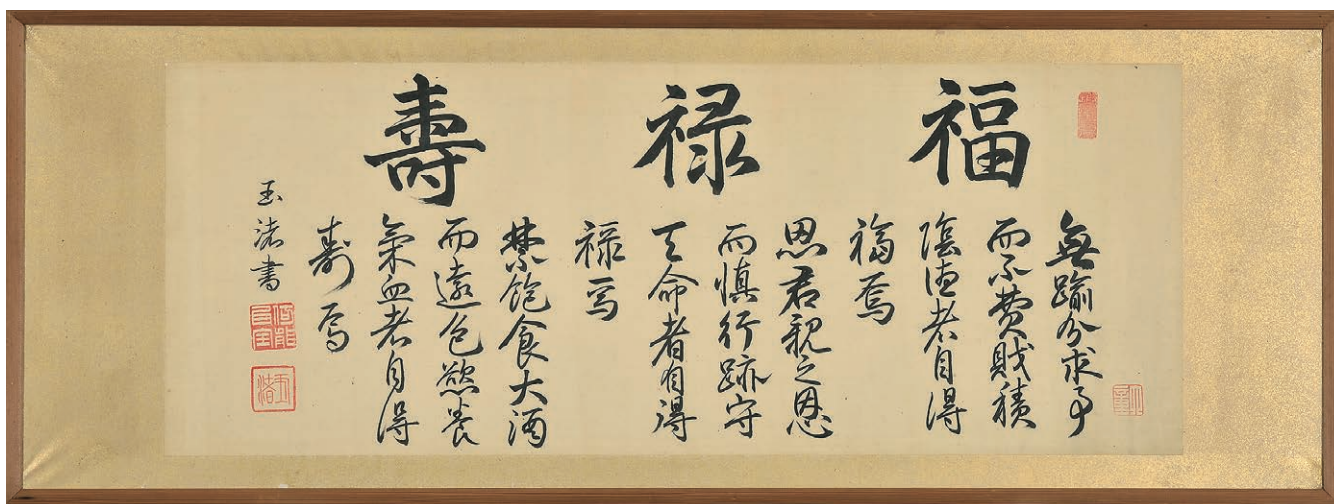
(近江商人博物館「小泉重助展 図録」より)

小泉300年のあゆみには4つのポイントがあります。

① 着実さと機敏さ

享保元年(1716)に行

重助が大正13年(1924)に北米商業視察において、経営上の大きな示唆を受けたことである。シカゴのデパート、マーシャルフィールド支配人



丁稚部屋に掛けられていた扁額

重助家本宅の丁稚部屋
写真提供：いすれも近江商人博物館

分を^{こえる}踰こと無く ことを求めて
財を費やさずして
陰徳を積む者は 自ずから福を得る
君親の恩を思い 行跡を慎み
天命を守る者は 自ずから禄を得る
飽食大酒を禁じて 色よくを遠ざけ
氣血を養う者は 自ずから寿を得る

③ 特殊特徴品主義

第3のポイントは、三代目

商を開始し、130年間の長い揺籃期を経た弘化4年(1847)になって、初めて京店を開設した着実さと機敏さである。商品流通を統制していた株仲間が、天保の改革によって解散を命ぜられたのは天保12年(1841)12月であり、株仲間再興令がだされるのは嘉永4年(1851)3月である。京出店は、まさしく株仲間解散令の最中を狙った開店だったことになる。明治4年(1871)の大阪出店にしても、明治政府による株仲間統制の廃止と重なる時期であった。

② 三代目重助と神明講小泉組の役割

第2のポイントは、無嗣のまま没した2代目重助家の後を三代目重助が選定養子として後継したことである。その選定には、敬神と同族の親睦のために元文5年(1740)以後200年以上にわたって続けられていた10〜15人からなる神明講小泉組が藩屏の役割を果たした、とみてよいであろう。

第4のポイント、中興の祖の三代目重助が店員の報酬を手厚く考え、実行したことである。利益金のほぼ3割を店員分配に回し、とくに多額の利益金の場合には5割を店員給与に充てている。近江商人の「売り手よし・買い手よし・世間よし」という三方よしを、従業員満足と顧客満足の実践による社会満足の達成と解すれば、重助の経営は、この好循環の最初に位置する売り手よし・従業員満足を重視した、まさに三方よし経営に通じるものであった。

(末永國紀)

④ 店員に厚い利益処分

の「特殊特徴品に依って生きることが、問屋の唯一の道である」という言葉に触発された重助は、小泉商店の光明は独自の商品開発によって始めて見出されることを確信した。以後の経営方針の背骨となったこの特殊特徴品主義は、堅実経営によって昭和恐慌を乗り越えた小泉商店の従業員宛てに、昭和5年(1930)に重助自ら執筆した『不況対策と小泉商店』のなかでも、繰り返し強調されている。

第2回 三方よし講座レポート

お客様に信頼されるためには、 人格を磨き続けなくてはならない

—小泉産業グループの信条—



明治時代後期のものと思われる小泉新平衛大阪支店の引き札

享保元年（1716）に麻布の持ち下り商いを開始してから約130年後、京都に麻布絹織物問屋を開業した小泉家は、24年後には現在の小泉産業グループ各社がある大阪船場に進出する。そして、その後、同郷の中江勝治郎とともに海外視察に出かけた3代目重助はこの視察によって経営上の大きな示唆を受け、独自の商品開発を進め、堅実経営で昭和の大恐慌を乗り越切り、長い時代の荒波をのりこえてきた。小泉産業グループは「三方よし」と「新しい着眼と独自の発想」という2つの経営理念を受け継ぎ、これら2つの理念を実践する上で、重視したのが商人道を歩む人間としての「人格」で



明治時代の大阪店
写真提供：いずれも近江商人博物館

あり、「お客様に信頼されるためには、人格を磨き続けなくてはならない」という考えから「人格の育成向上」が社是となっている。戦後、モノのない時代に電熱器、配線器具、電気スタンドなどの製造卸からはじめ、春になるとテレビから流れたCMでおなじみの学習机は、毎年児童福祉施設に寄贈を続けている。日本に世界に発展し続けてきた小泉産業グループの経営戦略・社員教育・CSR・三方よしとは、現代の小泉産業グループについて権藤専務の講演を以下に掲載する。

KOIZUMI

— 違う発想がある —

小泉産業グループのCSR経営の実践

小泉産業グループの最近の動き

小泉産業グループについて

グループの全体像は小泉株式会社グループ、小泉産業グループ、小泉成器グループ、この三つのグループで小泉グループということになっています。

昨年の売り上げは、小泉株式会社グループが、470億円強。小泉産業グループが、540億円強、平成元年に小泉産業から分社した小泉成器グループが820億円ぐらいです。

それぞれの時代、時代で会社がつくられたり、統合されたり、従来型のビジネスというのは、どうしても陳腐化していくので

すから、M&Aも常に検討しています。

「小泉ブランド」の刷新 2015年

ここ、3年間のトピックスとして、まずは、ブランドの刷新です。以前のブランドは、30年間、使い続けておりましたが、30年も経つと時代に合わなくなり陳腐化が始まります。そこで、これからの時代を見据えて見直しをかけるためプロジェクトを発足。各社から気鋭の社員を集めコンサルタントさんにもお願いしながら進めました。今後、20

年30年このブランドを使い続け、ブランドを、われわれのCSRの発信源にし、ブランドに恥じない行動をしていこうという願いを込めています。最終的に世の中で愛されるブランドに育てていこうとしましたので、10年たつて、このブランドの評価がどうなっているかというのが非常に楽しみです。

「300年の節目」とこの 先輩への感謝

新しいブランドができた翌年2016年は、小泉太兵衛が持ち下り商いを開始した享保元年

(1716)から300年の節目の年を迎えました。この機会に何か恩返しができないかと大阪のリーガロイヤルさんをお借りし、三つのグループ企業で活躍いただいた多くの先輩方を招待して三〇〇周年記念式典を行いました。従来、周年のパーティーでは、お客さま、仕入れ先さまをお呼びするというのが通例ですが、やはり感謝の意を先輩にお伝えしようということ、ほとんどのOBの方にお越しいただきました。

先輩方が築いてこられた宝物を、われわれが引き継いで次の世代に渡していくことが、

講師



小泉産業株式会社 専務取締役

権藤 浩二氏

1952年生。1976年中央大学商学部卒業、同年小泉産業株式会社入社、首都圏ハウジング営業部長などを歴任、2016年より現職
小泉産業(株)専務取締役
(株)ホリウチ・トータルサービス代表取締役

小泉産業グループの概要

(2018年7月現在)

本社：大阪市中央区備後町
創業：1716年(享保元年)
設立：1943年
資本金：1,575百万円
従業員：1,671名(連結)
事業内容：持ち株会社
子会社：14社
売上高：538億円(連結)

創業300年小泉産業グループの足跡

<https://www.youtube.com/watch?v=rXZoovC4u4w>



先輩をご招待した感謝のつどい



創業300年感謝の集いで飾られた創業当時のようすのパネル



南面の各階バルコニーが緑化されたコイズミ照明 R&D センター

この場で確認できたのかなと思います。また、次の100年に向かって、もうスタートしていきますので、しっかり渡せるようにしていかないといけないと改めて感じました。

パーティーの会場の入り口には、琵琶湖の風景をバックパネルにし、湖畔を行く近江商人の原寸大モデルを配置。往時を彷彿させる展示で皆さまに楽しんでいただきました。

コイズミ照明 R&D センター

301年目の2017年、昨年ですが、大阪市内に新社屋を竣工しました。事業の中心の照明事業は、LEDに全部変わり、従来型の照明、ランプのビジネスが成り立たなくなり、製品をつくる上で、いろんな試験をす

るわけですが、その項目が全て変わるという時代の変革の時期だったので、弊社グループも、それに準じて設備の更新が必要になってきました。

さらに事業所が分散をしていたので集結させようと思い切った大きな投資をしました。私が入社して、もう40年になります。最大の投資となりました。ずっと財務担当の私は、もう、ひやひやでした。社長が一番高い土地を買うので、

「ちよっとこっちの方がええんちゃいますか」

とだいぶ言ったのですが、

「行くわ」

との一言でこの地が決まりました。

平成29年度大阪府第7回おさかみどりのまちづくり賞奨励賞をはじめ、新社屋に関しては多

くの表彰をいただき、非常に話題性のある建物になっています。立地した場所は、住宅地なので、町内会さんにご挨拶に行ったとき

「コイズミです」と言うと、

「あつ、コイズミ知ってるわ」と言っていただけ、すごく評価されているのだなと実感した覚えがあります。その時に

「できるだけ緑の多い建物にしてくれ」ということで、建物南側の各階バルコニーや、屋上にはたくさん

の本を植えました。数年たてば本場に憩いの場になるだろうと思っています。

竣工したときには町内の皆さんにもお越しいただき、いまから、一緒にこの地域で頑張っていきたいことをお伝えしました。

小泉産業グループのCSRへの取り組み

リコールがきっかけとなった品質への取り組み

1998年、それまで照明器具の主流であった安定器方式がインバータ方式に代わり省エ

ネ・瞬時点灯、長寿命というインバータの時代が始まりました。

その時に、住宅用のシーリングライトを先駆けて発売して売上を拡大し「コイズミの独り勝ち」というぐらいに言われま

したが、思いがけなくも製品に不具合が発生しました。

トータルの子見と言うか、技術力、解析力が不足していたことが要因で、残念ながらリコールということになりました。

CSRマネジメントの構造

コーポレートブランドマネジメント

“グループ理念系列”に基づいて、コーポレートブランド価値の最大化を図り、社会に愛され信頼される企業をめざす

品質マネジメント

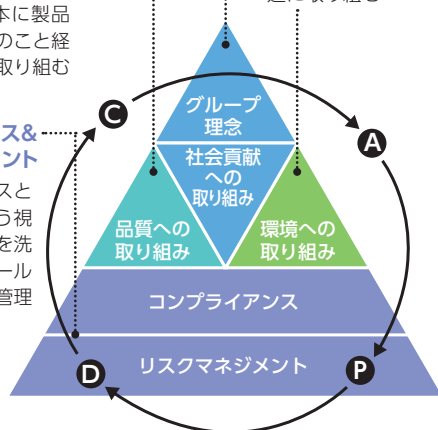
ISO9001を基本に製品品質はもちろんのこと経営品質の向上に取り組む

コンプライアンス&リスクマネジメント

コンプライアンスとリスク管理という視点から管理項目を洗い出し、社内ルールを整備・維持・管理する

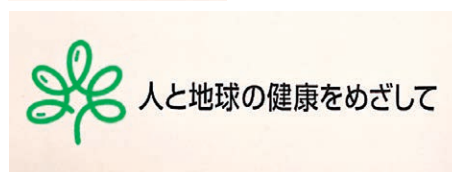
環境マネジメント

ISO14001を基本にサプライチェーンを含めた環境経営の推進に取り組む



CSRへの取り組み 前夜

- 1998年 ・ インバータ器具不具合発生 自主回収実施
- ・ 品質強化への取り組み開始
- 2001年 ・ ISO9001 認証取得
- 2002年 ・ ISO14001 認証取得
- ・ 企業活動コンセプト「人と地球の健康をめざして」を策定



コイズミグループの社会貢献事業の一つが「デスク・コタツ寄贈活動」です。学習机はすっかりおなじみの商品ですが、これとともに家具調コタツを毎年全国の児童養護施設にお届けしています。ただ製品を届けるだけでなく社員が出向いてその場

デスク・コタツ寄贈活動

小泉産業グループの社会貢献活動

で組み立てています。

毎年春休みに全国の児童養護施設に社員が何い、子供たちと一緒に組み立てをしていますが大変喜ばれています。初めてドライバーを持つ子供もいますし、学習機のビジネスは、学習環境を提供し健やかな子どもに育っていただきたいという理念がありますので大変有意義な事業だ

この活動のきっかけは、東日本大震災でした。大震災発生後、被災地支援をされているNPOの方々とお話する機会があり、小泉としての協力を申し出て、震災の翌年の2012年に福島で行ったのが始まりです。この時、私は二つの大きなショックを受けました。一つは、

お客様には大変なご迷惑をおかけすることになり、社内では回収処理や関係官庁への報告などの仕事が発生し、もう2度と起こしてはならないという苦い経験をしました。

このことがきっかけとなり品質をしっかりと担保しようと品質のISO9001の認証取得に全社挙げて取り組みました。それまで経験や勘に頼ったり、あるいは仕事の進め方も属人化していたこともあって、ISOシステムを導入することで、われわれの仕事の中身を変えてしまおうと強引に進めました。書類も多く大変な作業量になりましたが認証を受けることができました

した。次の年には、環境のISO14001の認証を取得。このことが契機となってCSRへの取り組みが始まったのです。

【組織の見直し】

小泉産業は元々、照明事業、家具事業、物流事業などの事業部制だったのですが、2006年に各事業を分社し、ホールディングスが各社を括るグループ経営体制に移行します。事業の専門性の向上と経営判断のスピードアップを図るためです。そしてホールディングスの重要なガバナンス項目としてCSRマネジメント

メントを設定し専任部署を設け、全国社員研修会など、CSRの全社推進を開始しました。

【倫理行動方針と社会貢献指針】

さらにCSR推進の拠り所として倫理行動方針と社会貢献指針という二つの方針を作りました。毎年10月を倫理月間とし、その間は全社員が週1回みんなの方針を唱和しています。

中には、反社会的勢力との接触とかは駄目ですよというように当たり前のこともありますが、記載されていることは気づかされることばかりです。



コイズミ国際学生照明デザインコンペの表彰式の記念撮影



デスク・コタツ寄贈活動の組立て模様



コイズミ国際学生照明デザインコンペの審査模様



デスク・コタツ寄贈活動の贈呈式後の記念撮影

大震災後一年を経過していても放射能の測定器が設置されていたこと。もう一つは、児童養護施設に入所している児童・生徒の8割は親御さんがいるということでした。育児放棄、暴力等によって施設に移ってきているのです。愛情に飢えている子どもたちは、最初はよそよそしいのですが、

25年間やってきました。照明の文化の向上ということと、若い人たちの育成に寄与できればというところで始め、海外の照明デザイナーさんとコラボする機会も生まれました。このコンペは世界中の学生が対象でしたので、各国の大使館や領事館に伺い、趣旨を説明したり当然、現地の大学や専門学校へのピアー

ろが、その使用方法を訊ねると「いや、やったことないんですよね」誰かやるんでしょうね」という話で、それじゃあ困るよなということで、全員がスキルを身に付けようと思ったのです。私も2度ほど研修を受けましたが、いまは新入社員の研修のカリキュラムにもなり、NPO 法人大阪ライフサポート協会さんに協力いただいているのですが、このNPOさんには当社の会議室を提供させていただき、定期的な一般の方を対象とした救命講習が開催されています。立地がいいこともあり

多くの方が受講されています。このことで感謝状もいただきました。

R&DセンターのCSR

現代では地球環境を視野に置いた建築物が求められます。さらには近隣住民、従業員に配慮した建物ではないと時代にマッチしません。

2016年に建設したこの建物の特徴は、各階の南側バルコニーにたくさんのお木が植えられていること、真ん中にある巨大な吹き抜けにより自然光と自然の気流を活用できることです。またフロアが別れていても階段

「ちょっと一緒にこれやってみよう」と言うと楽しそうに作業を行い、皆で協力して組み立てることを続けるようになったのです。「小泉産業さん、ありがとう」という垂れ幕を作ってくれたり、一緒に昼食をいただくなど感動します。時期や場所の選定などの調整もあるので全国の児童養護施設協議会のみなさんとともに事業を行っています。

審査員には、キッチンマンの醤油ビンデザインされた栄久庵憲司さんはじめ、日本のデザイン界、建築界の御所にお願

現代では地球環境を視野に置いた建築物が求められます。さらには近隣住民、従業員に配慮した建物ではないと時代にマッチしません。

今後は、卒園後の生徒さんの就職支援ができればいいなと思っています。学習机などの贈呈事業は、毎回50セットぐらいの規模です。できる範囲で長く続けていきたいと思っています。

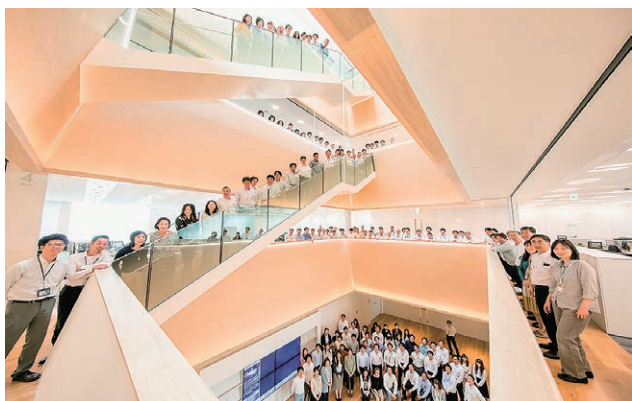
先生方には、ほとんど手弁当でお願いしたのですが、自分のデザインにアドバイスいただけるというところで3万3000人から応募があり、そのまま社員になった人もいます。

コイズミ国際学生照明デザインコンペ

1987年から世界の学生を対象に照明のデザインコンペを

全員が救命士を目指す取り組み

ショールームには多くのご来訪者があり、また社内でも多くの社員が働いていますのでAEDを随所に設置しています。とこ



コイズミ照明R&Dセンターの中央階段吹き抜け



毎年、新入社員研修に組み込まれている AED 講習



50年以上続く西教寺(比叡山坂本)の新入社員研修



新入社員研修では五個荘の街並みも見学コースに入れている

小泉産業グループの社員教育

人材教育プログラム 「コイズミアカデミー」

コイズミアカデミーという新入社員から役員の研修までメニユー化をしています。特徴的なのが、「道学」と「実学」を基本としていることです。

「道学」は、いわゆる人の道です。リーダーシップを発揮することを学ぶのですが、映画の八甲田山の話がよく登場します。リーダーが判断を間違えると、みんなが変なところへ行ってしまうので大切なことです。いろいろな例を使いながら「道学」人の道と「実学」ということを中心に階層別に行い、最近力を入れているのはマネジメントです。

座学だけでなく、屋久島の体験研修というのもあります。入社20年経って全員屋久島に2泊3日で行きます。屋久杉を見て1回人生をリセットしてとの思

で顔が見えコミュニケーションが非常によくなっています。照明メーカーですので、当然照明の用途活用にも十分配慮してい

ます。白い明かりや黄色っぽい明かりになるなど照明の仕掛けがあります。これも、国交省のサステナブル建築物等先導事業と

いうことで、ほぼ満額の補助金をいただきました。ただし、生産性向上を目的としているのでその報告のノルマはありました。

いなのですが、みんな感動して帰ってくるので継続しています。

屋久島とは対照的に比叡山の麓、坂本の西教寺さんでも毎年研修を続けています。かつて小泉商店時代には、重助さんの本宅での見習い修行がありました。

が、いまの時代、それは到底できませんので、せめてこのお寺で1週間、学生から社会人への切り替えの研修を徹底して行います。

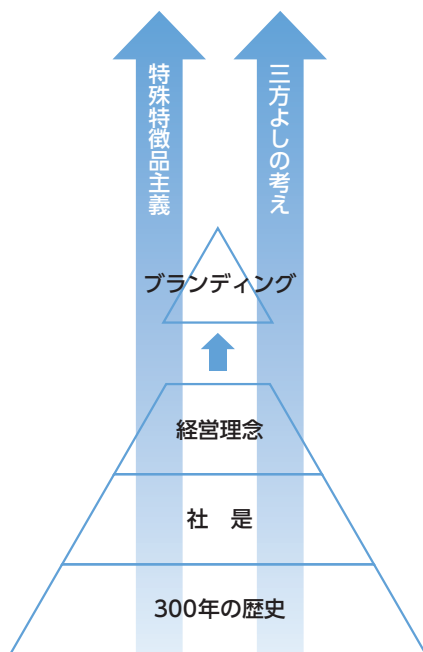
私も入社後、西教寺にいきましたので、もう50年以上続いています。昔は暖房といっても火鉢しかなかったのですが、今は施設もすっかり良くなり冷暖房完備で、ご飯もお代わりできます。もう一つ新人研修の場として外せないのは、ルートであり、出発点である五個荘です。近江商人博物館を見学し、本宅も見せます。

三代目重助が北米視察で、問

屋の生きる道について大いに触発され、「特殊特徴品の開発」を会社の重点指針にします。それと、「三方よし」の精神、これが小泉の理念のベースになっています。

歴史の積み重ねの中で、自然と会話の中にでてくるのは風土だと思っています。まだまだやらないといけないことはたくさんありますが、CSRは身の丈に合った内容で長くできるテーマに取り組んでいくことが大切だと思っています。





哲学 × 歴史 = ブランドパワー

「三方よしの考え」「特殊特徴品主義」は、300年の歴史の中で受け継がれ、磨き上げられてきたコイズミの経営哲学の2本柱である。

これはコイズミのブランドアイデンティティそのものであり、「あっ、なるほど!」と驚きと好感をもって受け入れられる商品や活動を生み出す原動力となっている。

大阪滋賀県人会様のご尽力に感謝

NPO法人三方よし研究所 理事長 塚本喜左衛門

奇異ながら私は、本日の講演のテーマである小泉さまとは同じ東近江市五個荘金堂町の出身で、非常につれしく思っております。先祖が、慶応3年に五個荘を出て、京都で呉服問屋を創業し今日に至っています。本日は昨年、ミシガンでの船上パーティーや本年の新年会でお付き合いいただきました大阪滋賀県人会の皆様のお世話をしていただき盛大に開催できましたこと、NPO三方よし研究所のメンバーとして本当に感謝しております。

近江商人には、商都の大阪で創業された方がとても多く、近代日本の礎を築いてこられたことを実感しています。

います。NPO法人三方よし研究所は、日本各地はもとより、中国、台湾、ベトナム等へ、近江商人の足跡を訪ねる事業や本日のような「三方よし講座」を行っています。

このたびは、小泉産業グループの権藤浩二専務さまに、「CSR・三方よし経営の実践」と題するご講演をいただき、ありがとうございます。講演に先立ち、同志社大学名誉教授の末永國紀先生から、創業家小泉家について束の間で恐縮でしたがご紹介いただきました。今回もご尽力をいただきました大阪滋賀県人会さまの、格別のご厚情に心より感謝を申し上げます。

てんびん棒

昨年来大阪滋賀県人会との友好関係が深まり、本誌掲載の三方よし講座には格段のご尽力をいただいた。さらに、5月に開催された全国滋賀県人会連合会総会には理事長が講演したこと、ご縁もあり、三方よし研究所メンバーにもご招待状が届き、全国滋賀県人会のみなさんと親しく交流を深めることができた。

三方よし研究所創設時のメンバーは1991年に開催された国際AKINDOフォーラムに深く関わっており、その後も各地の県人会の方々とは個人的には交流を続けていたが、今年の総会では久しくお目にかかる方も多く、とりわけ印象的だったのが、「最後の近江商人」と自認される駒井健司さんであった。高校卒業と同時に知り合いを頼って、高島から盛岡に出て流通革命真つただ中、高島出身者が経営する盛岡のスーパの専務として敏腕を振るわれた。盛岡に伺った時にはいつも歓迎いただいていた。1970年以降、近江商人企業の出身地採用はどの企業でもなくなったが、出身地への温かいまなざしは変わることがない。